

ボリビア「ECO-TOMODACHI」の活動紹介

2017年12月 (VOL1)

JICA帰国研修員活動



現場からリードする廃棄物処理

ボリビア都市圏部で毎日0.5kg/1人、地方では0.2kg/1人の廃棄物が発生しています。現在の生産と消費の傾向が継続する場合、ボリビアを含める南米諸国での廃棄物は、1.42kg/1名に増加することが予想されています。

ボリビアでは、2015年に法律第755号が発令され自治体レベルでの廃棄物処理が義務付けられ「母なる大地と自然環境の保護」が重視されています。しかしながら、大都市、中間都市、村落での廃棄物処理は組織体制、技術移転・定着、公共投資、エンパワーメント・住民参加やアクター間の連携が非常に脆弱であり公衆衛生の悪化、環境負荷の増大、資源の喪失につながります。このため地方レベルでの政策作りや現場での活動を強化する必要がありますが非常に高いです。

2017年、ボリビアの中心部であるコチャバンバ県でJICA課題別研修



コース「コンポスト (B)」と「総合的な廃棄物管理 (B)」コースにこれまで参加した帰国研修生6名が「ECO-TOMODACHI」グループを立ち上げ廃棄物処理の普及活動を開始しました。彼らは、自分たちの自治体で日本で得てきた技術を実践し、現場の条件に合わせた技術の適用化に取り組んでいます。自分の地域の得意分野を広く普及させるため定期的に中間の研修生の現場訪問や他の自治体や学生向けの研修を実施しています。2017年11月24日に初めてサカバ市、ティキパヤ市、コルカピルワ市の6名の元JICA研修生が、

サカバ市の市清掃公社 (GERES) に集合し同じ県内の自治体環境担当技師やシモン・パティエニョ大学の学生ら (計45名) を対象にセミナーを開催しました。(セミナーの内容は、下記参照)

2017年で「ECO-TOMODACHI」帰国研修員のグループは、約700名を対象に様々な研修を行いボリビア国内の他県からも研修実施の依頼が相次いでいます。

今後も帰国研修員の皆さんが、現場から廃棄物処理をリードしていくことが期待されます。

ECO-TOMODACHI

帰国研修員紹介 (写真左から右) :

- テルセロス・オマルさん (コンポストB、2013年) コルカピルワ市
- オレジャーナ・リーチャードさん (コンポストB、2010年) ティキパヤ市
- グティエレス・クリスティアンさん (コンポストB、2017年) サカバ市
- ペレド・エルネスト (総合的な廃棄物管理B、2017年) サカバ市
- アビレス・エドインさん (総合的な廃棄物管理B、2017年) サカバ市
- サンチェス・デニスさん (コンポストB、2016年) ティキパヤ市
- ◇ 写真手前：渡辺 磨理子 (JICAボリビア事務所担当NS)

【コチャバンバ県、廃棄物処理セミナー内容】

- 1) JICAの廃棄物処理に係る協力
- 2) サカバ市清掃公社の紹介 (法制度、機能性、運営)
- 3) 3Rとゴミの分別の重要性
- 4) サカバ市廃棄物処理の規制
- 5) 日本の技術を活動したコンポスト (高倉方式)
- 6) 高倉方式の実践
- 7) コルカピルワ市の活動紹介

【帰国研修員それぞれの得意テーマ】



ティキパヤ市：住宅地と市場などで住民参加を促進しコンポストの素材を確保！24トンのコンポストを生産！ボリビア国内で生産量が一番！



サカバ市：現在、高倉方式とミミズコンポストを導入。ミミズコンポストから液体コンポストを大量生産！次なる挑戦は、最終投棄場の管理を改善するため福岡方式を学ぶこと。



コルカピルワ市：とにかくキヌアを加工した後の粉状の有機が多く、コンポストの湿度を保つのが困難。コンポストが呼吸できる様、日本では米殻などを使っていたことを思い出し、現地で適用できるオプションを実験中！



サカバ市：自治体の廃棄物処理に係るノルマを現在作成中。コチャバンバの中間都市ではノルマ作りをリード。住民の意見とニーズを考慮し「ゴミから解放された街づくり」を目指している。日本の街にはゴミ箱がないのは、ポイ捨てをする人がいないからことに気が付き感激した！とセミナーで熱く語った。

【帰国研修員の声】



グティエレス・クリスチアンさん
 (「コンポストB」2017年)

2015年の5月に自分がサカバ市の清掃公社の運営を担当することになった当初、初日に現場を見て一体自分は何をすればいいのか全く分からなく悩みました。まずは問題を真正面から見るべきと思いゴミ処理施設があるハルカロマの現場に自分の執務室を移しました。さらに、2010年にJICAの研修で訓練を受けたコチャバンバ人がいると聞きティキパヤ市のリチャードに会いに行き有機の廃棄物をコンポストにする技術を生まれて初めて見ました。ティキパヤがモデルとなり2017年に日本大

使館の草の根無償資金協力でハルカロマにもコンポスト場を建設し、JICAの支援で自分もその年に九州で研修を受けることができました。日本人は、自ら開発した技術を持つだけではなく、その技術を多くの人と共有する素晴らしい価値観を持っていると強く感じました。リチャードや日本で多くの先生方が自分に教えてくれた様に、今後もコチャバンバやボリビアの人々に破棄物処理の重要性と技術、経験と情熱を大いに広めていきたいと思えます。知識は、分け合うとどんどん増える宝物です。